

## 4～6月期は輸出の増勢維持も、海外需要動向に懸念あり

円安が数量面は波及し、4～6月期の輸出は増勢維持。但し、欧州や新興国の景気回復の遅れにより増勢が減じられている点には留意が必要。輸入が弱めとなったこともあり、純輸出は1～3月期に続き、4～6月期もGDP成長率を押し上げる見込み。

### 円安が数量面へ及び、6月の輸出は堅調

財務省が公表した2013年6月の貿易統計によると、輸出額（名目輸出）は前年比7.4%（5月10.1%）へ増加幅が縮小した。財務省試算の季節調整値でも前月比1.1%（5月3.2%）と7ヶ月連続の増加こそ確保したものの、伸びは鈍化している。但し、こうした名目ベースでの減速は、6月に名目実効ベースで日本円が前月比4.3%も増価した影響が大きい。円高により、輸出物価が前月比2.7%（輸入物価は3.2%）と大きく下落した。当社が輸出物価（輸出価格）の変動を控除の上で試算している実質ベースの季節調整値は6月に前月比2.7%（5月0.8%）と明確に伸びを高めており、昨年終盤からの円安が輸出数量に対し押し上げ効果を発揮していることが読み取れる。

### 欧州や新興国の需要低迷が先行きのリスク

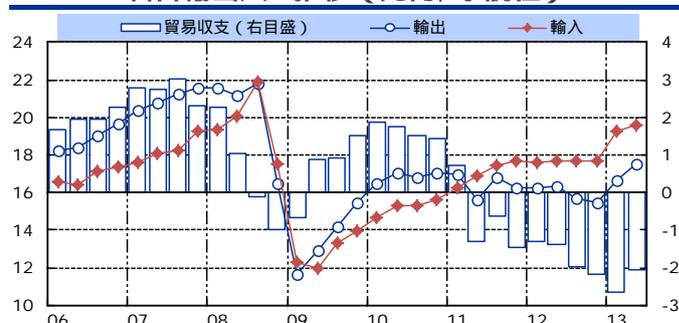
四半期ベースで見ても、4～6月期に実質輸出は前期比1.8%と1～3月期の1.6%に続き、2四半期連続で増加した<sup>1</sup>。但し、増加ペースは1～3月期からほとんど変わっていない。これは景気回復の遅れている欧州向けや、一部の新興国向けの輸出が低調に推移し、足を引っ張っているためである。為替変動による押し上げが、需要動向の下振れにより一部打ち消され、輸出の増勢加速を妨げている。実際、4～6月期の実質輸出を仕向け地別に見ると、米国向けは前期比7.8%（1～3月期2.2%）と増勢が大幅に加速したが、アジア向けは2.1%（1～3月期0.4%）と小幅持ち直し程度にとどまり、EU向けは0.4%（1～3月期2.1%）と底這い状態にある。なお、アジア向けでは中国向けが3.8%（1～3月期2.8%）と2四半期連続で増加したが、昨年の中中間トラブルで落ち込む前の2012年4～6月期の水準を未だ7%も下回ったままである。当面は、円安による押し上げが続き、日本の輸出は増勢を強めていくと考えられるが、需要動向次第では増加ペース

### 名目輸出入の推移（兆円、季調値）



（出所）財務省

### 名目輸出入の推移（兆円、季調値）



（出所）財務省

### 実質輸出入の推移（兆円、季調値、2010年基準）



（出所）財務省、日本銀行

<sup>1</sup> ちなみに輸出数量指数に季節調整を施すと、1～3月期前期比1.2%、4～6月期2.7%であり、方向性は一致する。

が緩慢となる可能性には留意が必要である。

## 輸入は6月に堅調も、4～6月期では振るわず

6月の輸入額（名目輸入）は前年比11.8%（5月10.1%）と2ヶ月連続で二桁の伸びを示した。但し、季節調整値では前月比1.7%（5月4.3%）と減少しており、円高の影響が認められる。実質ベースで見ると、鉱物性燃料や繊維製品、一般機械の輸入が好調で、6月の輸入は前月比4.2%（5月0.7%）と急増した。但し、6月こそ急増したが、4～6月期で見ると実質輸入は前期比0.3%（1～3月期1.9%）と低い伸びに留まっている。機械関連輸入は伸びたが、鉱物性燃料や化学製品が減少した。

## 輸出回復により、貿易赤字は緩やかに縮小

貿易収支を季節調整値ベースで見ると、輸出増加（前月比1.1%）と輸入減少（1.7%）により、赤字額が5月の7,779億円から、6月は5,987億円へ縮小した。円安の効果が輸出数量面に及び始めたことから、2月をボトムに貿易赤字が縮小へ向かいつつある。今後も、基調として見ると、貿易赤字は緩やかな縮小を続ける見込みである。但し、円安により輸入品が割高となり輸入減に繋がる点を勘案しても、4～6月期の輸入は弱めだった。6月に輸入が大幅に増加した点を踏まえれば、消費税率引き上げ前の駆け込み需要も寄与し、7～9月期には輸入の増加が赤字拡大をもたらす可能性があるだろう。

## 4～6月期は純輸出が成長率を0.2%Pt程度押し上げ

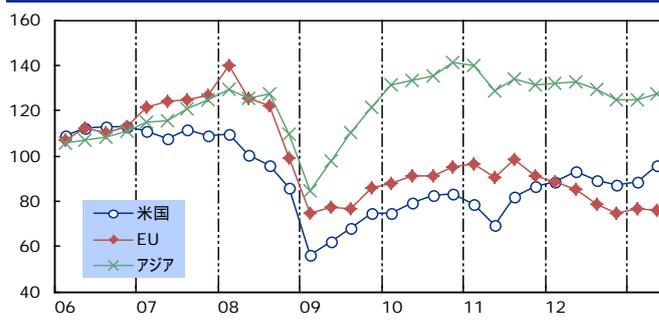
既に述べたように、貿易統計（財貿易）ベースで見て4～6月期は実質（財）輸出が前期比1.8%と増加する一方、実質（財）輸入は0.3%と横ばいにとどまった。従って、財収支は4～6月期に黒字幅が拡大（赤字幅が縮小）し、GDP成長率を押し上げる方向に作用する。更に、サービス収支動向などを勘案した上で、当社は現時点で、4～6月期に純輸出が実質GDP成長率を前期比0.2%Pt程度押し上げると予想している（1～3月期実績は0.4%Ptの押し上げ）。

## 実質輸出は米国向け加速、アジア向け小幅持ち直し、欧州低迷

当社試算の実質輸出により、仕向け地別動向を見ると、まず米国向けは6月に前月比6.3%（5月3.8%）、4～6月期でも前期比7.8%（1～3月期2.2%）と明確に増加し、日本の輸出全体をけん引した。4～6月期は自動車が主力の輸送用機器が前期比11.8%（1～3月期2.0%）と大きく伸びたほか、一般機械や化学製品も好調だった。

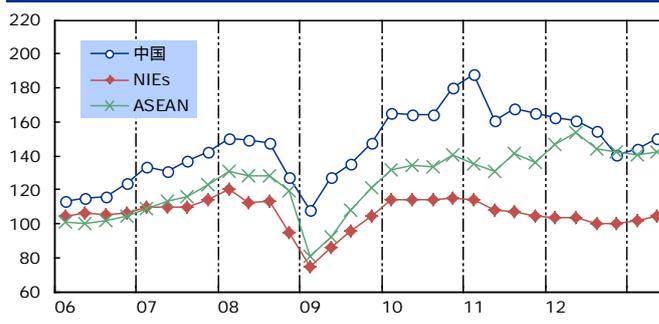
アジア向けは6月に前月比3.1%（5月0.8%）と2ヶ月連続で増加、4～6月期でも前期比2.1%（1～3月期0.0%）と4四半期ぶりの増加に転じた。中国向けが4～6月期に3.8%（1～3月期2.8%）と持ち直した影響が大きい。但し、中国向けの増加は、昨年後半に日中間のトラブルにより落ち込んだ反動による部分が大きく、また2013年4～6月期の輸出水準はトラ

地域別実質輸出の推移（2010年=100）



(出所) 財務省、日本銀行

対アジア実質輸出の推移（2010年=100）



(出所) 財務省、日本銀行

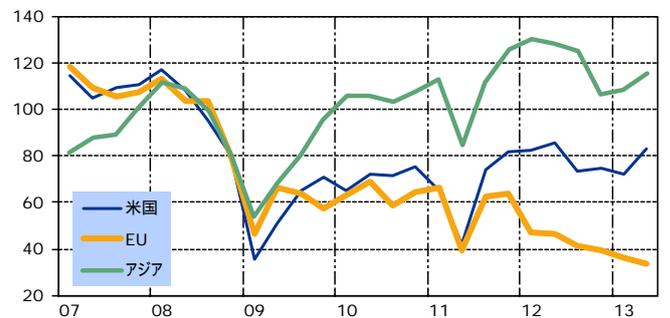
ブル発生前の1年前の水準を7%程度下回っており、過大評価は禁物である。なお、中国向けの4~6月期内訳では、輸送用機器が前期比25.1%と大幅に増加し、寄与度では(3.8%のうち)2.0%Ptと過半を占めたほか、食料品輸出が30.6%(1~3月期58.6%)と伸びたのが目立った。中国向け以外では、NIEs向けが4~6月期に前期比3.1%(1~3月期1.5%)、ASEAN向けは1.4%(1~3月期1.1%)の増加だった。

EU向けは5月に前月比8.5%と落ち込んだ後、6月は11.4%とリバウンドしたが、4~6月期では前期比年率0.4%(1~3月期2.1%)と底這いである。4~6月期では電気機器の低迷が目立った。

## 自動車輸出で見た仕向け地の景気回復

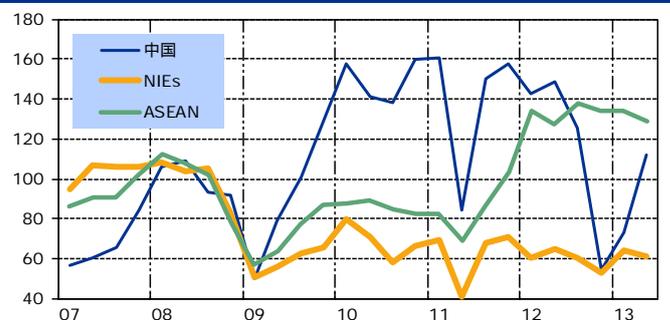
なお、こうした米国向け堅調、アジア向け小幅持ち直し、EU向け低調との動きは、日本の代表的な輸出品である自動車輸出の動向から鮮明に読み取ることが出来る。自動車輸出を台数ベースで見ると、米国向けの堅調さとEU向けの低迷が際立っている。また、アジア向けでは中国向けのリバウンドが示されるほか、ASEAN向けは高水準で一進一退、NIEs向けは底這いだった。

自動車輸出台数の推移(2008=100)



(出所)貿易統計

アジア向け自動車輸出台数の推移(2008=100)



(出所)貿易統計